

## 1 得点分布及び小問ごとの正答率

〈表1〉得点分布

得点	人数	660人	
	人数	%	
100	0	0.0	
90～99	8	1.2	
80～89	42	6.4	
70～79	107	16.2	
60～69	132	20.0	
50～59	146	22.1	
40～49	112	17.0	
30～39	69	10.5	
20～29	35	5.3	
10～19	9	1.4	
1～9	0	0.0	
0	0	0.0	

\*合格者の中から、無作為に抽出した660名(12.2%)の結果である。

〈表2〉小問別正答率(%)

大問	小問	正答率	大問	小問	正答率		
目	問一	84.7	目	問一	45.3		
	問二	66.5		問二	20.1		
	問三	33.0		問三	85.6		
	問四	30.8		問四	55.6		
	問五	37.9		問五	53.5		
	問六	74.4		問六	52.8		
小計			小計				
54.6			52.2				
二	問一	89.1	四	問一	(1)	78.0	
	問二	I			20.8	(2)	54.4
		II			32.2	(3)	79.2
	問三	50.5			(4)	70.5	
	問四	①			68.3	(5)	60.5
		②			82.0	(6)	75.9
	問五	39.1			(7)	74.7	
問六	73.6	問二	62.8				
小計			小計				
57.0			71.7				

〈表3〉

大問	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
目 文学的文章	68.4	69.6	66.5	70.2	54.6
二 説明的文章	58.2	53.7	54.2	56.8	57.0
三 融合(古典・表現)	51.3	38.8	46.9	52.0	52.2
四 言語事項・書写	70.4	67.8	67.2	58.0	71.7

## 2 分析結果の概要

〈表1〉について、70点以上の人数は全体の23.8%、40点未満の人数は17.2%で、昨年度と比べ、それぞれ0.3と0.1ポイント下がったものの、分布状況に大きな変化はない。

〈表2〉について、正答率80%以上の問題数は5問(昨年度8問)、正答率40%未満の問題数は7問(昨年度8問)であり、ともに減少した。

読むことの基礎的な力を問う目問一、二問一、三問三については、正答率が高いものの、思考力、判断力、表現力等を必要とする目問三～問五、二問二、問五、三問二は、いずれも正答率が低い。四の言語事項・書写の問題は、おおむね正答率が高かったものの、問一では、日常的に使い慣れていない語彙の読み書き、主述の対応を正しくする問二の正答率はやや低い。

〈表3〉について、文学的文章を扱った目問一の正答率は、過去5年間で最も低く、言語事項・書写の問題の四問一の正答率は、過去5年間で最も高い。

3 小問ごとの内容及びねらい

大問	小問	内容	出題のねらい	出題形式			評価の観点			
				記号選択	抜出	記述	話すこと 聞くこと	書くこと	読むこと	知識 理解
目	一	文学的文章	文脈に即して適語（心情を表す語句）を補充することができる。	○					●	●
	二		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。	○					●	
	三		文章の展開に即して登場人物の心情をとらえ、説明することができる。			○		●	●	
	四		文章の展開に即して内容を的確にとらえ、説明することができる。			○		●	●	
	五		文章の展開に即して登場人物の心情の変化をとらえることができる。	○				●	●	
	六		表現の仕方や文章の特徴を的確にとらえることができる。	○					●	
目	一	説明的文章	文脈に即して適語（接続詞）を補充することができる。	○					●	●
	二		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。		○				●	
	三		文章の展開に即して内容の違いをとらえることができる。	○					●	
	四		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。	○					●	
	五		文章の展開に即して内容や要旨をとらえ、説明することができる。			○		●	●	
	六		文章の展開に即して要旨をとらえることができる。	○					●	
目	一	融合（古典・表現）	漢文の訓読のきまりを指摘することができる。			○			●	●
	二		文章を読み比べ、共通する内容をとらえることができる。		○				●	
	三		文の構成や内容をとらえ、適切に区切って読むことができる。			○			●	●
	四		文章を読み比べ、内容をとらえることができる。		○				●	
	五		文章の情報を活用し、その効果を説明することができる。			○		●	●	
	六		文章の情報を活用し、条件を踏まえながら自分の意見を書くことができる。			○	●	●		
四	一	言語事項・書写	学校教育用の漢字を正しく書くことができ、常用漢字を正しく読むことができる。			○				●
	二		文の成分の照応について誤りを指摘し、正しく改めることができる。			○		●		●
	三		行書の特徴を指摘することができる。			○		●		●

#### 4 標準解答及び考察



##### 〈標準解答〉

問一	ウ
問二	エ
問三	(例) みんなの決まりを破ることを思いとどまった自分を認めてくれた上に、自分で採った大きなイタドリがもらえるよう配慮してくれたことに感謝する気持ち。
問四	(例) 自分が採ったイタドリを持ち帰り、家の人に自慢したい気持ち。
問五	ア
問六	イ

##### 〈ねらい〉

豊かな心を育てるという観点にも配慮し、文脈に即した内容の把握など、文学的文章を読むための基礎力や、登場人物の心情、表現の意味や特徴を、叙述に即して的確に理解し表現する力等をみる問題である。

##### 〈考察〉

- ・ 全体の正答率は、54.6%と例年より低い（昨年度70.2%）。
- ・ 読むことの基礎的な力をみる問一、問二、表現の仕方や特徴をとらえる問六の正答率が高い。
- ・ 文章の内容や登場人物の心情をとらえ、記述形式で説明する問三、問四の正答率は、それぞれ33.0%、30.8%とかなり低い。問三は、「自分のイタドリがもらえたことに感謝する気持ち」と答えたものが多く、「今日はえらかったぞ」と頭をなでる兄やんに対するテツオの涙の意味を十分にとらえていない解答が目立った。問四は、テツオが大事にした「三人に共通する気持ち」について答えるべきところを、「みんなのことを平等に気づかう気持ち」などのように、テツオの気持ちについて答えたものが多かった。
- ・ 登場人物の心情の変化を表す言葉を選ぶ問五も、正答率は37.9%と低い。誤答の約80%が「ウ」を選んでおり、登場人物の言動を手がかりに、心情の変化を的確にとらえる力が不足している。

##### 〈今後の指導〉

- ・ 生徒の読むことへの関心や意欲を高める学習課題を設定し、本文の表現を根拠に、生徒の多様な読みを引き出しながら、登場人物の言動や心情、思考の変化などについて検討・吟味する授業展開を工夫する。
- ・ 「読むこと」の指導だけでなく、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の指導との関連を図り、読み取った内容について書いてまとめたり、話し合ったりするなど、生徒の表現する力の向上に結びつく授業場面を設定する。
- ・ 授業で扱った教材に関連する文章や本を紹介する、学校図書館等を活用して生徒の読書活動を積極的に促すなど、多様で良質な文章表現に触れさせる機会を増やす。



##### 〈標準解答〉

問一	ウ
問二	I せみの鳴き声 II 「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ち
問三	a
問四	① ア ② イ
問五	(例) 現象を人間から切り離して観察し、説明することで、現象の正確な理解に役立つという長所があるが、人間の心の中や、人間と世界とのかかわりが無視されるという短所もある。
問六	エ

### 〈ねらい〉

論理的な見方や考え方を養い、視野を広げるという観点にも配慮し、接続詞の理解や文脈における語句の意味の把握など、論理的文章を読むための基礎力や、論の展開に即して内容を正確に読み取り要約する力、全体の要旨をとらえる力等をみる問題である。

### 〈考察〉

- ・ 全体の正答率は、57.0%とほぼ例年並みである。
- ・ 文脈に即して接続語を補充する問一、文脈における語句の意味を把握する問四、本文の要旨を把握する問六の正答率は高く、説明的文章を読み取るための基礎力は、ある程度身に付いていると考えられる。
- ・ 抽象的な表現を、具体的に言い換える問二、本文中で繰り返される語について、その意味内容の違いをとらえる問三、文章の主旨をとらえ、要約して書く問五の正答率が低く、文章の中心となる内容を的確に読み取る力や、文中の言葉を使ってまとめる力が不足している。
- ・ 問二では、「外的な現象」の言い換えとして、「自分の気持ち」と答えた例が目立ち、説明的文章を読解する上で必要となる、抽象的な表現をわかりやすい言葉に置き換えながら理解する力が不足している。また、問五では、解答に文脈のねじれのある文が多く、問いの条件に従って、説明する内容を整理し、まとまりのある文を書く力に課題がみられる。

### 〈今後の指導〉

- ・ 段落ごとの詳細な読みだけでなく、文章全体の中で問題提起や結論にあたる部分を大きくとらえさせる授業展開を工夫する。
- ・ 「何が書かれているか」だけでなく、「どのように書かれているか」にも着目させ、内容の正確な理解に加え、文章の展開や構成、その効果について考えさせる場面を設定する。
- ・ 説明的文章の中で使われる抽象的な概念を表す語句等に慣れさせ、設問の条件や字数制限に合わせたまとめ方を意識させる。
- ・ 平素から、比較的長めで論理性の高い文章を読ませ、文章の一部分または全体について、その要点をまとめさせる場を多く設けるとともに、根拠を明確にししながら自分の考えや意見を述べさせる。



### 〈標準解答〉

問一	一生之計、在少壯之時也。
問二	漂泊の思ひ
問三	月日は百代の過客にして／行きかふ年もまた旅人なり。
問四	願いごと
問五	(例) 使う箇所 1 (例) 答辞のはじめに、今の季節と思い出を聞き手に思い起こさせ、強く印象づける
問六	(例) 私はみなさんに、「一期一会」という言葉を贈ります。この言葉は、私が担任の先生に教えていただいたものです。人との出会いを一生に一度のことと考え、大切にしていくことが、互いのきずなを強くし、人生を豊かなものにするのだということを、この言葉から学びました。みなさんも、これからの出会いを一生に一度のものとして、大切にしてもらいたいと思います。

### 〈ねらい〉

郷土のすぐれた言語文化に親しむという観点にも配慮し、古典を含む詩歌と文章の、表現や内容を理解する力、文章の情報を活用して自分の考えを表現する力等をみる問題である。

### 〈考察〉

- ・ 全体の正答率は52.2%と、ほぼ例年並みである（昨年度52.0%）。
- ・ 古文を読むことの基礎的な力をみる問三の正答率は85.6%と高いものの、漢文訓読の基本的なきまりについて問う問一の正答率は45.3%と低い。誤答としては、一・二点を施すべき箇所にレ点を使用する例や、助動詞の「也」に一・二点を施す例が多くみられた。
- ・ 問二は、文章を手がかりにしながら、古語の現代における意味を理解し、それに対応する表現を既習の古文の中から指摘する問題であったが、正答率は20.1%と低い。正答率が低い理由として、「旅に対する思い」という問いの条件を踏まえていない、または古文の中にある「漂泊の思ひ」という語の意味を正しくとらえていないことなどが考えられる。
- ・ 答辞の構成案の中で、古文の素材を使う箇所とその効果について記述する問五、後輩へのメッセー

ジとなる言葉を条件に従って記述する問六の正答率は、それぞれ50%台であり、およそ5人に1人が無解答であった。情報を読み取り活用する力や、目的や意図に応じて、自分の考えを書く力に課題がみられる。

#### 〈今後の指導〉

- ・ 日頃から音読・朗読などを通して古典に親しませるとともに、古典を読み深めるためには、基本的な知識や技能が必要となることを、生徒に実感させるような授業展開の工夫をする。
- ・ 明確なねらいのもとに、教師や生徒同士の対話や交流が生まれるような言語活動を授業の中に組み入れる。
- ・ 異なるテキストを読み比べ、その違いや共通点について話し合ったり、目的に応じて資料等から必要な情報を読み取ったりして、それを日常的・実用的な言語活動に生かす場面を設定する。
- ・ 折に触れて古典や詩歌などのすぐれた作品を紹介したり、学校図書館等を活用しながら課題解決のための学習を行ったりして、言語文化に対する興味・関心を高め、日常の自己の言語生活を豊かにする意識をもたせる。

### 四

#### 〈標準解答〉

問一	(1) かえり (2) きょだく (3) おか (4) 積 (5) 包装 (6) 専門 (7) 練
問二	適切でない部分 行きたいです 書き直し (例) 行くことです
問三	部首名 きへん 熟語 (例) 植物

#### 〈ねらい〉

言語生活の向上を図るという観点にも配慮し、文字力、文の成分の照応、書写の基礎的な力等について、それぞれの理解をみる問題である。

#### 〈考察〉

- ・ 全体の正答率は71.7%と、例年に比べて高い(昨年度58.0%)。
- ・ 問一の漢字の読みと書き取りについては、生徒が日常的に使い慣れていない語彙(「許諾」の読みや「包装」の書き取り)の定着が不十分である。「許諾」については、「しょうだく」と解答した例が最も多かった。
- ・ 主述の対応の誤りを一文節で指摘し、書き改めさせる問二については、適切でない部分を「行きたい」、書き直しを「行くこと」と解答した例が多く、文節についての理解が不十分である。

#### 〈今後の指導〉

- ・ 漢字は、一字一字を正確に読み書きできるだけでなく、語や語句として理解し、文脈に即して使えるようにするため、実際に読んだり書いたりする機会を多くして、習熟を図る必要がある。また、生徒が日常生活の中で、学習した漢字を使用しようとする意欲や態度を育てるよう配慮する。
- ・ 推敲の指導については、よりわかりやすい表現になるよう、常に立ち止まり、見直しながら書くようにさせる。その際、ペアやグループで誤りを指摘し合ったり、表現の仕方を学び合ったりして、自分の表現に役立てさせる。
- ・ 教科国語だけでなく、他の教科や領域においても、言葉そのものに対する興味・関心を養い、言語生活を豊かにしていくための指導を日常的に継続して行う。